

書名：国際人のすすめ

世界に通用する日本人になるために

著者：松浦晃一郎

出版社：静山社

出版年月：2011年7月

総ページ数：277ページ

ISBN：9784863891241



推薦者

石濱博之

鳴門教育大学大学院教授
言語系コース（英語）

松浦晃一郎氏は、駐仏大使などの経験、及び10年のユネスコ事務局長としての経験に基づき、国際人として得られた成果と学んだ教訓を述べながら、国際社会における日本の存在意義を説いている。副題に、「世界に通用する日本人になるために」とあるように、我々日本人が将来どのように国際社会と関わり合うかについて、上記の経験を通して力説している。国際人をめざす若い世代を育てようとする教育関係者には、是非一読してもらいたい。

内容は三部で構成されている。第一部は、「ユネスコ改革に奮闘する」ことを述べている。第二部は、「世界に通用する国際人の資質」である。第三部は、「日本流が通用しないダイバシティ組織」について記述している。特に、教育を論じる観点からは、第二部と第三部は必読であろう。

第二部は、「語学力が基本」、「記憶力のつけ方」、「判断力がカギ」、「議論するコツ」、「中期ビジョンを打ち出す」、「体力がすべてを決める」と六項目を挙げている。そして、国際人としての経験から「英語教育を小学生から」に賛成であり、「聞くこと」と「話すこと」が基本であることを述べている。非常に説得力がある。ちょうど、日本の公立小学校において外国語（英語）の教科化が話題になっている状況では、参考になるであろう。

第三部は、異文化理解教育にもつながる話題を論じている。国際組織を動かす秘訣を述べて、日本流と欧米流の常識の違いを示している。著者は日本の外務省で40年間言いつけられた3つの仕事上の教えを守ってきた。それは、「1. 長話をするな—ひとの話はよく聞け。2. 自慢話をするな—仕事には謙虚であれ。3. 責任から逃げるな—言い訳をするな。」(p. 240)であるが、それと対照的に、国際社会の常識3カ条は、「1. できるだけ長話をする。2. 成功した自慢話だけを話す。失敗談など絶対にしてはならない。3. 不利な点の指摘にはすぐに反論し、絶対に責任を認めてはならない。」(p. 244)であった。しかしながら、国際社会の常識に反して3.の責任の所在に関しては、責任から逃れない点は日本での教えを守り、欧米人からも高い評価を得たとしている。管理職が、その部署で問題が生じた時に、責任をとらなければ、部下はついてこないと述べている(p. 250)。本当にその通りである。『武士道』(新渡戸稲造著)の精神を連想させる。

この書物はどこの部分からでも容易に読むことができる。また、この書物をとおして、国際化とは何か、国際人とは何かを読み取り、日本人のあり方を考えてみよう。

